

以上の検討結果、『口議』の著者・演山省翁は元代の曾世榮ではなく、宋代の史演山(字は省)であり、出身は江南であると判断するに到った。さらに本書の内容から、小児科医師は家伝、道家の学を兼ね、活動地域は主に安徽・江蘇・浙江省あたりと推定できる。演山は小児驚風痰熱の治療に長じ、病証・方薬・診療・調養などの論説は後世の医家に重視された。

多紀元胤の誤認に基づく『活幼口議』の著者に関する従来の通説は、改められるべきであろう。

(黒竜江中医学院医史教研室、北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究所)

5 仏典と『スシュルタ本集』に みられる看護

杉田暉道

仏教では病人の看護は、出家僧の修行の中でとくに重視されているが、インドの伝統医学であるアーユルヴェーダではどのように扱われているかを比較検討した。仏典では『摩訶僧祇律』卷二八(『国訳一切経』律部一〇、八七五―八七六頁)を、アーユルヴェーダでは『スシュルタ本集』(大地原誠玄訳『スシュルタ本集』第一編総説篇、第一九章)を用いた。

先ず『摩訶僧祇律』について三種の病人の内容をみると、飲食、薬物、看病の三つの条件によって病人の転帰は異ると述べているが、三つの条件の中で看病をもっとも重視している。さらによい看病を行うには命を捨てる気持で行わねばならない。よい看病を行うと大きな功德

が得られると述べている。

病人の心得として病状によい薬物や食物を正しく摂取し、看病をきちんと受け、病人として正しく療養することをすすめている。また看病人の心得として私欲の心を持たないで、病人のためによい薬物や食物を与え、病人の大小便の便器をいやがらないで処理しなければならぬいと述べ、さらに病人が犬死しないために食物のとり方、嘔吐、排便などについて詳しく説明し、正しい心で療養すべきことを説いている。これらは現代からみても立派な看護学および患者学の理念をなしているものといえよう。

ついで『スシュルタ本集』についてみると、病室はよい環境の場所を選ばなければいけないと述べ、ついでよい病室の条件を四つあげ、きちんと敷物をしいた寝台が必要であるとし、さらによい看護の実際の方法について説明している。また患者が体を動かしたり、大声で話したりしてエネルギーを消耗することおよび性器が刺戟を受けるような行動、さらに体の新陳代謝が盛んになるような飲食物および酒は患部や全身状態を悪化させるので、

そのような行動ならびに飲食物の摂取をしないよう固く戒めている。最後にこの病気は悪魔によつて増悪するのでこれが患者に近づかないようにする必要がある。それには患者は身体を清潔にし白い清浄な衣服を着て病室に祭壇を作り、燈明、水、その他沢山の立派な供物を供えて悪魔を供養し、患者は心を安らかにして楽しい談話を聞き、早く病気を治そうという気持で静かに療養しなければならぬと記している。

『摩訶僧祇律』と『スシュルタ本集』にみられる看病を比較すると、前者はまさに病人の療養および看病の心得を述べているのに対し、後者は病室の選び方、病人の療養上の精神面、行動面、および避けるべき飲食物などについての注意、親友の看病の方法および魔よけの祭事の励行など、病人の治療方法全般についての心得を述べている。

さて先に『摩訶僧祇律』で病人を看病すると大功徳が得られると記していたが、これが中国で紀元四五〇年頃に成立していたといわれる『梵網經』（『国訳一切經』律部一二、三四〇頁）においては、「八福田の中に看病福田は第

一の福田である」とその効果がさらに強調されている。

『梵網經』は慈悲をもっとも強調する大乘仏教の戒經であることを考えれば、看病の重要性とその効果を今までの仏典より一層強調するのは当然なことで考えられる。

日本では平安期に出た最澄がこの經に説かれている戒律によって大乘戒壇を建立した。これから日本でも『梵網經』が広く読まれるようになり、看病が仏道修業の中でもっとも重要視されるようになった。

(神奈川県予防医学協会)

6 和丹両流の家格について

奥 富 敬 之

十一世紀から十二世紀にかけての頃、京都政界においては、ひとつの傾向が顕著だった。佐藤進一氏が官司請負制と呼んだものが、しだいに成立しつづつあったのである。算道を「家業」にした小槻氏は、弁官局を主宰する官務(左大史)の地位を「家職」として、官務家と呼ばれるようになった。明経道を「家業」にした中原・清原両氏は、外記局(少納言局)の大外記を「家職」にし、明法道を「家業」にした坂上・中原両氏は、明法博士・大判事・檢非違使尉を「家職」とした。

また、文学を「家業」にした菅原氏は、侍読・文章博士・大学頭を「家職」とし、神道を「家業」にした中臣氏は、伊勢神宮・春日大社などの祭主・禰宜を「家職」